

『グローバル天理』第8号（通巻20号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「「国際参加」：貯水・植樹・アドベ建築の試み」

インド西部地震救援においてもカーストによる不公平から抗議行動があったと報道されているが、自然災害や戦争の被災者へ救援物資がきちんと行き渡らないことよく見受けられる。このたび天理大学の有志の学生・教職員・他による国際参加プロジェクトチームは、インドの地震被災地を訪れ、貯水のためのチェックダム建設やハリジャンのための安価で耐震性のあるアドベ建築、地域行政との協力による竹の移植を行う。

荒川善廣 「「元の理」の探究（5） 混沌からの創造 [2]」

「どろ海」によって象徴される混沌とは、親神の外にある何らかの实在（reality）ではなく、人間世界を創造しようと思われる以前の親神自身の有り様である。したがって、親神が「どろ海中を見澄ます」ということは、親神が自己自身を直視する（envisage）ということの意味している。「元の理」は過去の事実の話ではなく、「理」の話である。親神は元初りの混沌状態に理を通わせ、十全の守護の理を見いだすとともに、時間的な世界において実現されるべき雛型や可能性（potentialities）を、世界を始める前に見極めておかれたのである。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（5） 二項対立思考からの脱却」

この世の中の争いごとの多くは、自分は正しく、相手が間違っているとの二者対立の構図が原因になっている。政治や宗教、人種などの分野でそれが際だっている。交代を前提とした二項対立の場合は問題が少ないが、後へ引けない対決になった場合は深刻である。今回はそうした面から紛争というものを考えてみた。

末延岑生 「ことばと教育（5） ことばの元を探る [5]」

神授説の最後に天理教の『元の理』を元に「仕込み説」を紹介し、私見を述べる。親神が人間を創造するにあたって、象徴的ではあるが、言語を発するための最も重要な役自をになう息吹き分け、および舌の象徴としてとらえることができるであろう鱗（かれい）、さらには音節を切り分ける象徴としての河豚（ふぐ）などをことばの元となる土台として選んだ。すなわちこれらが言語生成のためのシステムとなって、人間の体内に組み込まれ、それが生得的なものとしてことばを使うために役立ったというのである。かれらにはそうした土台の上に知恵としてのプログラムが仕込まれ、さらにソフトとしての言語が仕込まれていったものと解釈できる。

つまり、人間には、親神によって言語の competence（内的能力）の容器がまずはじめに仕込まれ、そして次に performance（運用能力）のための容器が仕込まれたと解釈していいだろう。さらに教祖の掲げた八つのほこりは、人間の持つ喜怒哀楽のすべてを順に網羅したもので、これらの感情を、はじめは態度、行動で示していたものが、後に言語となって表現されるようになったのではないかというのが私の考えである。

宮田 元 「宗教・スポーツ・教育（４） 宗教とスポーツ [2]」

剣道は、武士と武士との戦い、争闘をとおして発達していったもので、生死を賭けた勝負の中で、自分を守り、人を倒す技を修得することにある。剣道は、人を切る術を修練するものであるが、礼儀を重視している。礼儀の持つ謙譲さが技術を向上させ、精神を研ぎ澄ましていくからである。剣道にあっては、技術の修練と精神の鍛錬が二つ一つのものとして重要な意味を持つ。いくら技術があっても、いざというときに使えないようではどうにもならない。その技術を活かすことのできるものは、その人の心のもち方であり、精神的要素によるものである。禅すなわち宗教と剣道が心を通して深く結ばれていることを知る。

堀内みどり 「天理異文化伝道（18） 天理教のコンゴ伝道 [18] 天理教 憩の家診療所 [2]」

昭和42年4月に帰国した山本医師は、コンゴの医療活動を恒久的・継続的に展開するため、「憩の家」病院に海外医療科を設置。海外伝道部長を委員長とする海外医療対策委員会が発足し、海外に医療隊を派遣する母体が確立した。一方、山本は、詳細な検査、確実な診断、的確な治療をコンゴでの医療方針とし、出来るだけ最先端の医療を良心的に展開していった。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（20） 仏教と教祖 [1]」

教祖の前には幾つかの仏教諸派が現れている。具体的には浄土教・修験道・密教などがそれに当たる。それらはいずれも初期天理教の歴史にいくばくかの影響を及ぼしているが、今回はその中の浄土教を取り上げ、日本仏教の変遷とその土着化された特徴ともども鳥瞰してみた次第である。

佐藤浩司「天理教東南アジア伝道誌（11） 戦前のフィリピン伝道 [9]」

本宮寛（ほんぐうひろし）と共にダバオで伝道に従事した人として、塚本義輝がいる。塚本は昭和6年に伝道の承認を受けてダバオのミンタルに渡った。困難な中、地道な活動を続け、昭和10年1月にダバオ教会設立の許可を得るに至った。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（20） 共感の場」

誰かと周囲の人間のあいだに心のズレがある場合、当然しわ寄せは弱者の方にかかってくる。どこかに心通じ合わせる場面がない限り、ある人はひたすら孤独に追い込まれ、心の病を生み出すかもしれない。この時、心通わせる相手は、周囲に暮らしている現実の人間だけとは限らない。文化を越え、あるいは歴史を越えてわたしたちは、誰かと共感しあうことができる。その意味で、特に、文字の世界に親しむことの意味は大きい。書物の世界は、単に孤独を癒してくれるだけではない。さまざまな生きざまや思いにわたしたちを直面させ、自分自身の生を織り成すモデルを指し示してくれるという点こそ一層大切といえるだろう。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（19） 社会福祉とジェンダー [4]」

児童福祉法でもようやく認められるようになった「学童保育」の整備の必要性が叫ばれている。今回は著者自身の学童をめぐる取り組みをケーススタディとして紹介し、そこにジェンダー問題がいかにかかわっているかについて考察する。

上杉武夫 「アメリカ通信（17） ユニバーサルデザインと再生都市」

今回の焦点は、ユニバーサルデザインのもう一つ概念である「アクセシビリティ（accessibility）」である。アメリカは過去30年近くにわたって、高齢者と障害者のためのユニバーサルデザインの原則や法令を発展させてきた。その成果として1990年に「アメリカ人身体障害者法（ADA, the Americans with Disabilities Act）」施行された。ここでは新しい世紀においてサステナビリティ（sustainability）は自然との共生をはかるものであり、アクセシビリティは人間との絆をつくるものと位置づける。都市の再生に向けて、我々は原点に立ち戻り、神と人との根本的な価値を見出さなければならないだろう。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る（8）」

安井幹夫 「教養としての天理スポーツ [2]」

「教養」という語は、如何に生きるかという根本的な問題に関わるので、明確な定義づけは困難だ。天理教の教えにおいては、神は、人が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しむために、人

を創造したとされている。陽気ぐらしは「互いたすけ」によってのみ達成されうる。さらに、神から借りた身体を使うことのできることは、私たちの根元的喜びである。天理スポーツはその喜びの体現であり、そのことから天理スポーツに教養を見出すことができるだろう。